



富貴寺大堂（2019年2月12日撮影）

仏像画文軒丸瓦（ぶつぞうがもん・のきまらがわら） 富貴寺（大分県豊後高田市）出土

平安時代の浄土教建築を伝えるものとして、宇治の平等院鳳凰堂とともに有名なのは、平泉の中尊寺金色堂、そして国東半島の富貴寺大堂（大分県豊後高田市）であろう。実は、経緯は不明ながら、その富貴寺大堂の屋根に使用された軒丸瓦が、当館に所蔵されている。

富貴寺は、奈良時代に仁聞が開いたと伝えられるが、史料上の初見は、貞応2年（1223）の古文書（到津文書）まで下る。それによれば、「露浦阿弥陀寺」（富貴寺）は、この頃の九州地域で卓越した権勢を誇った宇佐八幡宮のトップ、大宮司家の父祖代々の祈願所であったという。宇佐八幡宮が富貴寺の所在する地域一帯に開発の手を伸ばしたのは11世紀頃のこと、富貴寺大堂は、宇佐八幡宮の神宮寺（弥勒寺）が広めた浄土信仰を背景に、12世紀に大宮司によって建立されたと考えられている。

大堂は、南向きで正面3間、側面4間の縦長の構造を持ち、平等院鳳凰堂、中尊寺金色堂と比べ、側面の柱間が1つ多い。その理由として、後二者の場合、内部中央に配置され、本尊の阿弥陀仏を安置する須弥壇のまわりを、念仏を唱えながら廻ることを前提に設計されているのに対し、大堂は、須弥壇の前方に座し、「観想」（念仏を唱えながら極楽浄土を思い描く修行）をする場としてされたからと考えられる。堂内周囲の壁・柱に阿弥陀浄土図が描かれているのも、まさしく極楽浄土の表現とみることができる。

かかる内部構造とともに目を引かれるのは、ピラミッド状の形状をもつ屋根であり、これは宝形造と呼ばれる。下方が未広がりになった特殊な形状の瓦を次々に差し込む行基葺という手法が使われていることも特徴である。そして富貴寺大堂の軒瓦には、平瓦に蓮弁、丸瓦に仏像が陽刻されており、後者は今回紹介する当館所蔵の軒丸瓦と同一の図柄を持つ。描かれている仏は、蓮華に坐した弥勒菩薩であろう。というのも、現在、富貴寺大堂の軒丸瓦は、すべてがこの図柄なのだが、大堂周辺からは、大堂創建時の古瓦が多数出土しており、これ以外にも3種の図像をもつ軒丸瓦が知られているからである。すなわち、当初の軒丸瓦には、内部の外陣小壁面に描かれた四方浄土図に対応し、各方位に鎮座する薬師（東面）・釈迦（南面）・阿弥陀（西面）・弥勒（北面）の四方仏が描かれていたと考えられる。この世の仏土としての富貴寺大堂の性格は、軒丸瓦によっても表現されているのである。

※附属図書館で展示しています。